

# 第30回 大学教育学会のシンポジウムⅡに参加して

首都大学東京管理部教務課教務係  
二宮 麻美

2008年6月7日（土）～8日（日）の2日間、目白大学で第30回大学教育学会が開催された。8日に参加したシンポジウムⅡ「大学における『教育力』を考える－教員と職員のコラボレーションの視点から－」の報告をした。

今回の総合テーマは「大学の教育力」。シンポジウムの趣旨は、大学の教育力を高めるための教職協働のあり方や、コラボレーションの可能性を探るというものであった。

まず、シンポジストである私立大学の職員からそれぞれの大学での「教育力」の受け止められ方や、教員との協働やその課題などについて報告があり、指定討論者である立命館大学の安岡高志教授から、大学教員としての見解を交えた我々職員に対する意見が投げかけられて、議論が進められた。

各大学の取り組みの概略は、以下のとおりである。

## ・目白大学

「全員参加型の入口対策～キーワードは『疾走』～」

入試広報担当課長から、教員・職員・学生が足並みを揃えることを意識した全員参加型の入口対策に取り組んでいることが報告された。入試広報の大きな特徴の一つである、自発的に集まるボランティアの学生広報スタッフ「メジスタ」の取り組みが紹介された。

## ・桜美林大学

「学生の学びの支援と職員の教育参加」

総合研究機構事務局長より、地域貢献の一環として教員と職員が協働し行った「不登校生学習支援」授業の立ち上げと実施についての報告があった。教員と職員が協働し学生の学びを支援するためには、個々の大学人としての意識改革と大学全体として職員の教育参加への必要性が述べられ、それらが組織化されることが必要だと報告された。

## ・立命館大学

「立命館大学における教育力の設計～これからの大学院職員像とは～」

教学部次長より、多くの大学改革を実現している立命

館大学ならではの教職協働プログラムについて報告があった。大学改革には、職員が自ら学ぶ姿勢が大切であり、これからの大学職員は大学院の修士課程や博士課程レベルの知識を必要とするなど述べられた。

## ・立教大学

「『コラボレーション』の前提を考える～教員・職員関係論の試み～」

大学教育開発・支援センター課長より、教職員の能力開発と協働について報告があり、教員と職員の協働関係については古くから言われている「車の両輪」という関係や、「プロジェクト型」での協働関係が述べられ、新しいプロフェッショナルモデルとしての「アカデミック・コミュニティ」という協働関係についての提示がなされた。

以上、各大学における教職協働への取り組みは大変参考になることばかりであった。しかしながら、各報告からはどの大学においてもまだまだ模索しながら取り組んでいる模様であることや、また組織の体系や職員の意識によっても様々な差があることを感じたところであった。この学会に参加して、教員と職員で協働して「教育力」を考えていくために自分ができることは何か、また本学組織としてはどのようなところを改善し、取り組む必要があるかを考えさせられ、本シンポジウムへの参加が自身の大学職員としての意識を高める良いきっかけとなった。FD委員会の事務担当としても、本学の教職協働を模索しながら、さらにFD・SD活動などを通じて今以上に大学教育の質を維持向上させるため取り組んでいきたいと強く考えた。

次回の「大学教育学会」は首都大学東京での開催になる。首都大学東京で働く我々職員の取り組みが他大学の参考になるよう、教員の方々とも協働できるように頑張っていきたい。